

アブヌワスは食べ物を持っていました。パンを持っていました。彼は、スープのようなおかずになるものが手に入るところを探していました。しかし、見つかりませんでした。ある場所に行き通りを通った際、誰かが中でスープか何かを作っていていいにおいがしてきました。彼はそこでパンを食べ終えてしまいました。そして家へ戻りました。後に、その家主と会いました。そして彼は「ありがとうございました。一昨日、私はパンを持っていたんですがおかずがなかったんです。でも、あなたの家のところでとてもいいにおいがしていました。そこで、お腹いっぱいまでそこにずっと座っていました。そしてその場所を去りました。というこわけで、感謝しています。」すると家主は怒りました。彼はこの男からお金を取れるのではないかと思いました。そこで彼は訴えに行きました。「アブヌワスが私の家を通して食事のにおいをとってしまい食べてしまった。そのせいで私が食べてもなんの味もしないし、食事は全くおいしくなかった。なぜかと思ったら彼が外で私の食事を盗んでいたんだ。」アブヌワスは呼ばれて尋問をされました。彼は言いました。「私はあそこを通っただけで通りで食べました。」「もしそうならこの男性にお金を払いなさい。」「どれだけ払ったらいいんですか。」彼自身が言いました。「私はこれくらい欲しい。」「そうですか。では、明日、この場所にお金を持ってきます。」アブヌワスはお金を持ってやってきました。コインを持って。そこへ着くと彼は家主に言いました。「では、座ってください。あなたのお金をあげましょう。」家主が座るとアブヌワスはチャリン、チャリン、チャリンとお金を下に落しました。「さあ、それを受け取って。音を受け取ってください、あげますから。」裁判官は「どういうことだ。お金をあげるから受け取れというのに、下に落としているではないか。」アブヌワスは言いました。「ええ。私は彼の食事は食べていません。私はにおいを食べただけです。ということで、彼についても私はお金をあげることはできません。お金の音だけ受け取るべきです。」